

## 《學界展望》

### コンスタンティヌス論争の進展

弓 削 達

#### (41) コンスタンティヌス論争の進展

數年前の舊稿でコンスタンティヌス帝(以下において(1)はコ帝と略記する)問題について學界展望をおこなってから五年餘がすぎさつた。この間における論争と研究の進展には正にめぐるましいものがあった。その活況を如實に示すものは、Piganol<sup>(2)</sup>に『Stroheker』と De-laruelle<sup>(4)</sup>があついで混沌たる研究論點の整理をおこなわざるをえなくなつてゐる事實であり、さらには一九五五年九月ローマで開かれた第十回國際歴史學會議第二部會第六日目の統一テーマとしてコ帝問題がとりあげられ Vogt と Seston による研究狀況の整理が行われたこと

も記憶に新しい<sup>(5)</sup>。つまり、コ帝問題は古代末期最大の問題と自覺されてゐるのであり、Stroheker も四世紀の二大中心テーマとして、コ帝問題と、四世紀末の都市ローマの異教反動とくに Historia Augusta の研究をかぞえている<sup>(6)</sup>。そこで本稿ではコ帝問題が古代末期さらにはヨーロッパ史研究においてしめてゐる地位と意味についての解説は前掲舊稿にゆずり、ただちに舊稿いごの論争の進展について展望したいと思う。

ところで、舊稿いご現在までの研究の進展のなかに一つの區劃がみいだされる。それは、一九五三年ごろを混沌の頂點とした論争も一九五五年ごろを以てある歸結に達していわば整理期に入ることである。この一應

の整理の仕事は Vogt<sup>(9)</sup> の論文にみるのであるが、しかしもちろん五五年という時点を厳密な意味で區劃點として主張することはできない。なぜなら、Vogt の論文のすぐあとで出た Historia 誌の Englin 古稀記念古代末期特集號<sup>(7)</sup>には、Alföldi, Downey, Moreau, Seston, Straub, Vogt<sup>(10)</sup> が花々しい論陣をばっており、論争そのものは現在までけつて終ったわけではない。しかしながら、相當数の研究者が五五年頃に論争の山がみえたことと判断していたことは、ちょうどそのころから、論争のまゝとであつた諸史料を用いてコ帝の思想的發展をはじめ帝の全體像にかんする綜合的敘述が現れたことに讀みとることができる。すでに五四年には Dittes<sup>(8)</sup> の大著が出たが、それを追いかけて Kraft<sup>(9)</sup> の研究が五五年秋に現れた。小著ながら Instinsky の著書もこれと前後し、五七年末には Voilki の豪華な大著<sup>(11)</sup>の刊行をみた。これらは、文献史料に収録されたコ帝の諸文書を概ね真正とみてその上に研究をうちたてている點でも共通した方法をとっているが、同じくコ帝の發したものである法典所收の勅法を史料とする研究も、Vogt, Gaudemet の論文<sup>(12)</sup> といふ八八年ぶりに現れた。Ehrhardt の研究<sup>(13)</sup> がそれである。

長く論争を主導した Vogt も五八年秋には、コ帝時代のローマ帝國を概観することができたのであるが、同じ彼は五五年に、今やコ帝研究の收穫期だ、と言明できたのである<sup>(14)</sup>。これらを考慮するならば、五五年を一應の劃期とみることは、大體の傾向としてみとめることができよう。本稿では、以上のような研究史の通觀の上に立ち、許された紙幅を考慮して、五五年ごろまでの論争の進展を辿らうとするものであるが、すべての學問においてそうであるように、とくにこのばあい、收穫された結果よりもそれに至る論争の過程こそ重要であり、論争過程の理解が收穫の當否の判断を與えるものであるという意味において、許される限定であろうと信ずる。本稿の扱えない多數の研究についての展望はまた稿を改めたい。

## 二

舊稿いこの時期においても論争の論點を提起しているものは Gregoire 説であるので、初めにこの説の要點を想起しておきたい。彼によれば、四世紀初頭にはキリスト教(以下、キ教と略記)を迫害するか否かの決定は政治的打算できめられ、帝國東部ではキ教が優勢だったから

東部の征服を企てた支配者はキ教に友好的態度をとった(テーゼI)。リキニウス帝(以下、リ帝と略記)はガレリウス帝領の獲得を望んだので三二一年の寛容勅令の本来の起草者となり、またキ教迫害者マクシムス打倒戦ではキ教の闘士となった(テーゼII)。コ帝は三二四年戦前にして初めてそれを宗教戦争として宣傳し、リ帝を再び異教側に走らせた(テーゼIII)。それゆえ、ラクタンティウス(以下Lact.と略記)の「迫害皇帝の末路」(以下、de mort.と略記)の初版(三二四年頃)では、リ帝がキ教の英雄とされ、夢に天使が現れ勝利をもたらす祈禱を教えたとされたが(cap. 46)、Lact. が後にコ帝の宮廷で加筆した改訂版で初めてコ帝もキ教の闘士とされ、夢で勝利の章徴を啓示されたとされた(cap. 44)(テーゼIV)。三二一年ガリアにおける異教的幻(Paneg., VII. 21. 4—5)が、夢物語の原型であり、Lact. 記事の盾面章徴は十年のVotaを意味するXに他ならぬ(テーゼV)。これに反してエウセビオス(以下、Euseb.と略記)に歸せられるコ帝傳(以下、Vita.と略記)は、Euseb. の草稿を核とし四世紀末のカイサレア司教エウゾイオスが多くの偽作文書を収録して創作した偽書である(テーゼVI)。なぜなら、

ヒエロニムスの名家傳はVita.をあげていない(テーゼVI. D)。Euseb. の教會史もトリアコンタヘテリコス(以下Triak.と略記)もVita.の幻記事を知らない(VI. 2)。エルサレム司教キュリオスのコンスタンティヌス帝宛書翰(三五一年)もVita.の幻を黙して置る(VI. 3)。その他ルフィヌスを初め四世紀でこの幻に言及している教父はない(VI. 4)。コ帝晩年のヘルシアとの平和條約は(Vita. 4. 57)歴史的事實でなく、ヘルシアとの友好時代なるテオドシウス時代を反映する(VI. 5)。三二〇年マクシミアヌスのコ帝暗殺計畫がVita.では三二三年におかれている(VI. 6)。コ帝とリ帝との再度の戦争が混同されずに三二四年戦を宗教戦として置く(VI. 7)。以上のようなGrégoire説にたいしてVogt, Pigniol, Baynes が反駁したが、Seston はGrégoireは同調し、Petit はGrégoire説を修正發展させたこと、Grégoireに反対の急先鋒は貨幣研究に基礎をおくAlfoldiであるが、彼の貨幣研究はv. Schoenebeckによって異論を呈されていること、これらの論争経過については前掲舊稿において紹介した。その後の發展を顧みると、古代末期の殆どすべての第一線研究者が論争にくわわっているこ

とは今も一貫する特徴であるが、今や Grégoire 説は多くの弟子たちによって代辯擁護(修正を含みつつ)されていること、これにたいしてかつて Alfordi が占めていた立場は Pio Franchi に代表される徹底した本文批判の上にのせられ、戦線は Franchi 説の攻防戦という局面をももつにいたっていること、これらが新たに注意される特徴である。

三

まず私の舊稿のときすでに發表されていながら舊稿では紹介できなかった重要な二、三の論文から始めたい。その一つは Grégoire テーゼ VI. 3, 4. にたいする全面的批判を意味する Vogt 論文<sup>(17)</sup>である。彼はつぎのように論證する。Rufinus は Euseb. 教會史 (IX. 9) ラテン譯に幻物語<sup>(18)</sup>を挿入した。Sozomenos が Rufinus の幻物語と Vita のそれとを異なるものとして並置している (I. 3. 1: I. 3. 2 *Myrtar de kate*) ことから分るように、兩者はたしかに異なるが、仔細に分析すると Rufinus は Vita に依存しながらしかも意識的アンティテーゼとして記されている。Bidez は Rufin. 記事 Philostorgios I. 6 及び後

者が依存した Cod. Angelicus 22 の Vita Constant. を比較し、Euseb. の Vita との相違を、十字架が夜東に現れたとされている點にみいだし、これらは、晝太陽の上の光の中から現れたとする Euseb. 記事に競争して四世紀後半に出現したと推定した。また Gregor v. Nazianz. Or. 5 はユリアヌス帝のユダヤ教神殿再建の試みに反対し當時(三六三年)續發した天變地異を語っているが、そこに語られている光の十字架の出現には、誓言も付されず説明も加えられず勝利の章徴として理解されることを疑っていない。ここには十字架出現の先例とそのキ教的解釋が前提されている。

Vogt 論文の中心は Grégoire テーゼ VI. 3 の検討、キエリロス (Cyril) と略記) 書翰の分析にあてられる。父コソスの時にはエルサレムに木の十字架が発見されたがコンスタンティウス帝の下では地上ではなく天に奇蹟の十字架が現れたとする書翰前文から、Grégoire, Seston がここには Vita の幻記事は知られていないと結論するの<sup>(20)</sup>に對し、Vogt はこれはエルサレムでの事件を比較しているのだ、という。當時 Cyril. はカイサレア司教アカキオスと大司教座についで *epi portaiou* 争つた。<sup>(21)</sup>

この争いにコンスタンティヌスを味方にするため(44)は差出地が聖地なることを再三強調し、アカキオスの太刀打できないような聖地での奇蹟の機会をとらえて書翰を書き、アカキオス前任者たる Euseb の Vita をあえて黙殺し、奇蹟がコ帝時代の聖地での地上の十字架発見にまさることを明言し、カリ、アでの十字架出現を凌駕することを暗示してさえている<sup>(22)</sup>。奇蹟の詳細な敘述のあとで、天に現れた十字架を先頭に進軍するようにすすめているのも Vita. I. 29 を前提している。最後に Math. 24. 30 を引き十字架の終末論的意味の考察をすすめているのも特徴である。Vogt によればまた書翰成立年は三五一年ではなく、帝と Eusebia との再婚(三五二/三年冬)いづ、對 Magnentius 戦中であり、正統派に近い Cyril がコンスタンティヌスに向いうるようなアリオス論争の一般状況、などを根據に、三五三年五月七日が奇蹟當日とされる。

Vita の幻記事は後のそれと比べると、コ帝の誓言、*tour de visa* なる説明が付されさらに夢でキリストの軍旗作製の指圖がなされている、など奇蹟物語の初發としての性格をそなえ、コ帝の精神的變遷など一層大きな背

景のなかで語られているなど、四世紀末の偽作者には不要の記述が多い。ここに十字架の終末論的解釋がないこともコ帝と Euseb. に合する。初期キ教に於ては十字架は再臨のキリストの徴(Math. 24. 30.)として終末論的意味をもっていたが、コ帝は光の十字架を自己の政治のために要求し、Euseb はここからコ帝を神の像とし、ロスの實現者とする政治神學を作った。これは、コ帝が勝利と軍旗の起源に對して後年に加えた自己解釋である。

以上の Vogt 論文は Grégoire 學派の後述の Moreau によってさえも全面的に承認されるところとなったが、これをおいけて Grégoire テーゼ VI. 2 への批判を意味する重要な Digantol 論文<sup>(24)</sup>が現われた。すでに機會あることに表明された見解を本文に即して實證したものである。力點は Triak. と Vita との幾つかの章句比較におかれる。第一。偶像破壊記事、Triak. 8 と Vita III. 54 との比較。後者は前者から多くの記事を借用しそれを手際に挿入している。第二。神殿破壊記事、Triak. 8 と Vita III. 55—56 との比較。アファカ神殿の破壊については後者(55)は前者を一層詳しくしたものだから問題はないが、アイガイのアスクレピオス神殿破壊記

事は前者になく後者にのみある。だが異教の道德的不名譽と神學的不合理をつく Vita の論旨は亂されてない。この章句は Petit (Piganiol 論文と不相識) によってテオドシウス治下の加筆とされた所で、Piganiol の論證とこれを發展させた後述の Vittinghof 論文によって Petit 説は崩れる。第三。兵士祈禱文記事、Triak. 9 と Vita IV 18—20 の比較。前者には祈禱文はなく、<sup>26</sup>「<sup>26</sup>」<sup>26</sup>が武器や肉體の強きでなく神を頼るべきことを教えて祈禱文を作ったとあり、後者には文章は異なるが同じ趣旨をのべた祈禱文があげられる。前者は、後者の祈禱文を並置して初めて充分な理解がえられる個所で、同一の著者を結論させる。Grégoire の説へいへ、Vita の祈禱文は Lact. de mort にあるリ帝が兵士に與えた祈りと同一物で、兩帝はミラノで末期異教の一神教に合致した祈りを共同作成したものであろう。

これらの比較に加えて Piganiol は、Vita の十字架幻そのものは Triak. になら、Triak. 18 は「<sup>27</sup>」<sup>27</sup>帝が何度も救世主の幻をみたと語っている事實を指摘する。この點は後述の Franchi, Vittinghof 以下の詳説を、Grégoire 以下 VI. 2 以下にみる。Piganiol は

さうに Euseb. の著述法を考察し、教會史 VIII. 14. 13—16 と Triak. 7 のバックシニス迫害記事を比較し、後者が前者から具體例を省略しながら結語のみを残したために生じた不整合を指摘し、Euseb. は古い著述の斷片に補完と訂正を加えて再利用するばかりか他人の作品をも同様に扱って利用したと論ずる。Praeparatio evangelica → Demonstratio ev. → Theophanie → Triak. 後半部、と發展するイデーの展開、パレスティナ殉教者傳にかんする Lawlor の研究<sup>28</sup>、Porphyrios, Hegesippos の利用にかんする同じく Lawlor の研究、などが注目せらるべきである。本文欄外へのノート記入、黒人の使用、モザイクによる機械的著作法、などが Euseb. に於て年代の無視と曖昧を生させたもので、Vita も同様にして作成されたものである。Vita に於て Triak. に付加えられた補完と證明で Euseb. 以外の史料から由來するものは一つもない。これが Piganiol の結論である。

#### 四

Vogt, Piganiol の論文に於て Grégoire テーゼ VI にかなりの楔がうちこまれたが、Grégoire 説の大きな歴

史的背景をなすテーゼ I II III は Grégoire 自身によって再び詳論されるに至った。「ローマ帝國における迫害」と題する著書がそれである。テトラルキア末期からコ帝までを扱ったその最終章において、著者は、當時の皇帝たちのキ教への態度決定は政治關係から、とくに敵の陣営中に味方をえようとする努力から理解されるべきであり、これら政治家の改宗については語りえないとし、次のように論ずる。コ帝は西方から東方に至る獨裁への途上でキ教の重要性にたいする認識を深め、ササン朝との戦争を計畫した晩年にもキ教徒に頼った。コ帝は先行諸帝と同様にキ教と太陽宗教とを結合可能と考えた。キ教は三〇三—三二四年の政治的決戦において大きな潜在的な役割を演じたのであり、キ教の勝利は個々の皇帝の個人的信仰の決断によつたのではなく、一般の、とくに小アジアの信徒の堅忍と殉教によつた。「キ教は小アジアと全世界で、コ帝なくして、コ帝以前に勝利した」(p. 88) と。この詳論によつて補強された Grégoire テーゼ I II III は、不評判であつたかつての Burchardt の粗い議論とは異り、テーゼ IV V VI の運命の如何にかかわらず、また Vogt による酷評にもかかわらず、大きな問題作として

残るであらう。

ところで同じ五一年に Grégoire テーゼ VI の補強に役立つ Downey 論文が現れている。Vita. IV 58 ff. は、コ帝が首都に使徒教會を建設しその中に自己の靈廟を立て十二使徒の石柱の中央に自らの石棺を立てるよう命じたと語り、ついでコ帝の病氣、受洗、死、悲しみ、遺骸の首都への運搬、使徒教會への埋葬(70, 71)が語られる。Downey は、この 71 にある「今日にいたるも尙見うる」なる一句について、Euseb. がコ帝の死後まもなくこれを書いたとすれば帝の墓が今尙使徒教會に見うるなどと言つた筈がない、*kai' ubi* とは通俗年代記や教化書などで話を本當らしくする言い廻しだ、とし、他方コンスタンティウス帝を使徒教會建設者とする Philostorgios らに注目して次のように結論する。コ帝は初め聖アカキオス教會に埋葬され、ついでコンスタンティウスの建てた靈廟にうつされた。使徒教會は三五年テモテの遺骨が首都コンスタンティノープルに移されたとき建築を始められ三七〇年に獻堂された。それ故 Vita の右記事は Euseb. のものではなく、Vita は Euseb. の死後多くの改變と補筆をうけたものであらう。この結論を補強する

ため Downey はコ帝を使徒教會建設者とする他の傳承を Paulinus v. Nola, Sokrates, Sozomenos に求め、それからがはずれも Vita の傳承と異なることに注目し、もし Vita が存していたなら Euseb. の權威はこれら後代の著作家に従われた筈だ、とする。反對にコンスタンティウスを建設者とする Prokopios, Konstantin v. Rhodos, Nikolaos Mesarites らビザンツ人は教會建築碑文を見ていたであろうから、彼らこそ信用さるべきだと Downey は考へる。

同じ五一年 Petit は自説の強化のために Libanios の Pro Templis 成立年代を考證して(33)。Vita Libanii 258 にのべられた「名譽」が Seeck の考えたようにテオドシウス帝による Praef. Praet. 任命を指すか否かは問題があるから暫くおくとし、他の Pro Templis の論述は三八年夏と三八年初頭、おそらく三八年十月十二日以前に記されたことを推定させる、と結論する。この結論は Petit にとっては神殿破壊記事の Vita への挿入の post quem として重要なのである。

五

Gégoire 自身によって補強されたテーゼ I II III は、五二年にいたると Moreau<sup>(34)</sup> によつても擁護された。彼はコ帝人間像の理想化をいましめ、コ帝が決斷的キ教と異教への寛容との間を動搖しているようにみえるのは、ナポレオンやインドの王朝と同様、政治家的・権力政治的考慮に發するものだ、とする。コ帝は勝利する側に身をおく幸運、否洞察をもつていた軍事的・外交的天才だった、と結論する。

同じ五二年にはコ帝による教會と國家との關係を古代國家の發展の中に位置づけようとする Koch<sup>(35)</sup> の論文が出ている。著者は、コ帝の個人的信仰は確定できないから帝の心理的理解によつてコ帝問題を解決する可能性は疑わしい、とし、むしろ帝の宗教政策的決斷の實際上の影響を考へるべきだとする。著者によれば、國家との關係にかんするキ教の考へには(1)人よりも神に従うべし、(2)この世の權威は神によつてたてられ、人によつて悪人を罰するのだからこれに従うべし、なる相反する二原理があるに反し、ヘレニズム支配者禮拜をもつ異教國家はロゴスよりミトスへの道を歩き、倫理的的政治的思想を基礎とするよりも不可觸の最高の權威に基礎をおいた。

コ帝はロゴスよりミトスへの最後の道を進み、アレクサンドロス、デアドコイ、カイサル、アウグストゥスよりアウレリアヌス、ディオクレティアヌスにいたる發展の完成者となった、として著者は史料によってこの發展を跡づけている。

コ帝の宗教に對して三二二年がもつ意味を考えしめる材料として Euseb. 教會史九・九・十以下が告げるローマに建てられたコ帝像があるが、文獻以外の證言を缺くところから Schönebeck らにより存在を否定されてきた。Gregoire も初めは否定したが、やがて、帝像のもつ救の章徴<sup>(36)</sup>とは十字形をした軍旗の竿がキ教徒により十字架と解されたものであり、戦勝後コ帝に獻げられた名譽軍旗であろうという解釋に移行した。しかるに五二年に現れた Kähler の論文<sup>(37)</sup>は、ローマの Konservatorenpalast にある有名な巨大なコ帝像頭部こそミルウィウス戦直後に元老院からコ帝に獻げられた帝像の一部であり當初はマクセンティウスのバシリカに所在せるものと推定し、Kähler 自身同所に新斷片を發見し、これらこそ Euseb. の告げるフォルムの帝像であろうと結論する。この像をコ帝末期の様式を示すとして三三〇年頃成立と考え

る Delbäck 定説への挑戦である Kähler 説も未だ假設の域を出ないが、五四年に至り Cecchetti<sup>(38)</sup> の贊同をえていることを付記しておく。

五二年の重要な刊行として忘れられないのは Galatielli<sup>(39)</sup> によるラテン頌詩刊本第二卷である。すでに一九四九年に現れた第一卷を追う第二卷は、三〇七年より三二一年までのコ帝頌詩すべてを含み、夫々について著者、歴史的背景、史料的价值、文學的價值にかんする學問的な解説を付し、佛譯と異讀註をそえた價值高く便利なもので、従来一八七四年の Baehrens 版に依存したのと比較にならぬほどの、コ帝研究への刺戟と飛躍を約束したものである。我々はいまや個人の宗教心の史料としての頌詩の問題性について知らされ、頌詩作家が學派的傳統や宮廷の指示にしばられて統治者の政治神學を表現するものではあつても、民衆の宗教は勿論、支配者の個人的信仰を語るものではないこと、さらにはテトラルキイにとって政治神學の重要性、について充分に知らされるにいたつた。

コ帝論争の激戦の年である一九五三年は、Downey説を粉砕するVogt論文<sup>(40)</sup>によって幕があがった。Vogtは、Vita. IV 71. *ὡς ὄψαυ* (*ὄστρ*) *εἰσέρει καὶ δὴ* にかんするDowneyの解釋は誤讀であり、墓が今日も尙みうるのではなく、墓が使徒たちと共に禮拜されている、犠牲を捧げられている、ことが今日もみうる、と言っていること<sup>(41)</sup>、71前半との關連でみると明かに埋葬後數ヶ月つづいた死者禮拜を語っていること、を指摘し、これは正にEuseb. が Vita を書いた時期にあてはまる、とする。また71—73は完全に統一をなし、かつこの個所は58—60と密接に結びつき、使徒の回想と彼の墓を結びつけようとするコ帝の60に言われた意圖が71で實現される關係になっており切離すことはできない。そればかりか以後約百年間、コ帝を建設者とする傳承のみが現れる。ユリアヌスによるコンスタンティウス頌詩<sup>(42)</sup> (355/6年)もコ帝の墓と教會との結合をのべ、Gregor v. Naz. のユリアヌス攻撃第二演説<sup>(43)</sup> (363年又は360年以前)もユリアヌスが軍隊に強いられてコンスタンティウス遺骸に伴い使徒教會の墓まで従ったという。だから當時すでに使徒教會の中にコ帝家の墓があり使徒類似の名譽をうけていた

と考えられる。Patinus, Sokrates, Sozomenos はたしかに Vita そのまゝではなすが Euseb. 的な觀念が働いてゐることは明かであり、Vita 本文の四世紀末改變なるDowney説を<sup>(44)</sup>にしても Sokrates, Sozomenos はその改變本文を手にしていた筈であり、各々の考えで力點をかえたのであろう。また Prokop. 後のビザンツ人が教會建築碑文をみていたであろうというのは空虚な推測にすぎない。教會建設者たる榮譽をコンスタンティウスに歸さんとする傾きをもつ Philostorgios は、Hieronymus, Chronik の 356年テモテの遺骨が首都に來た、357年にアンデレとルカが來た、と記されている記事から、この機會に使徒教會が建設されたと考え、ビザンツ人とDowneyがこれに従ったわけであるが、この解釋では十二使徒を意味する使徒教會なる名稱が説明されない。これらの考證の末Vogtは、使徒教會と十二使徒の墓をもつ靈廟とはコ帝によりたてられ、それが使徒の遺骨をひきよせ、そのさい恐らくコンスタンティウスにより改修された、と結論する。十二使徒の真中に帝の棺をおくという大膽な考えは古代的 Apothiose を含み、コ帝のような支配者にのみ想定しうるものであり、後

世の偽作者には思いつく考へではない、事情は幻物語でも同様だ、と Vogt は結ぶ。

Vita と共に Vita に収録された多くの文書をも偽作とする Gregoire テーゼ VI は、一九五一年オクスフォードで開かれた教父學會議で A. H. M. Jones によつて發表され Skeat<sup>(43)</sup>によつて刊行注釋された Pap. Lond. 878 によつても崩された。このパピルスは 319/320 年の請願文書の裏面で、コ帝がリ帝を打倒した後パレスティナ屬州人に發した書翰 (Vita II. 24-25) の斷片を収録する。しかしこの書翰はパピルスの發見がなくとも最良の教會史三寫本に収録されていることで疑問がないとする後述の Moreau 論文の指摘、Vita 校訂者 Heikel が該書翰を真正となした論證は今尙有效であるとする後述の Vittinghof 論文の指摘、のあることを付記しておく。

相つゞ Gregoire 説批判の前には Delattre<sup>(44)</sup> 論文の印象もけつして強くは感ぜられない。著者は Lact. de mort. 44 を三二二年の出來事に關する最重要史料と認め、この個所から、コ帝が三二二年戦前にキ教的な意味をもつと同時に多義的なモノグラムを兵士の盾に付したと結論する。併し Vita の幻記事には複雑な構成を認

め、元來のテキストでは Lact. の如き夢物語であつたが、輝かしい章徴なる意味であつた Lact. の caeleste signum を後人が天に現れた章徴と誤解し、Euseb. 記事を十字架幻物語で擴大した、と解する。この擴大は著者によれば先述のキュリロス書翰 (351 年) のことである。

## 七

同じく Lact. を最重要史料と認め乍ら一層深い洞察を示したのが Moreau<sup>(45)</sup> 論文である。著者は三二二年の幻にかんする Lact. 記事がいかなる状況下に成立したかの考察から出發し次のように論ずる。キ教に寛容だったマクセンティウスにたいするコ帝の勝利を、戦争直後に十字架又は次の勝利として示すことは不可能であつた。Euseb. 教會史の三一五年版にもかかる徽章の言及なく、わずかにコ帝像の右手に救の徽章が握られたと語る。これに對し Lact. de mort. 44 の「天の神の章徴」の言及は次のような意味をもつ。即ち 318—20 年に著作した Lact. の課題は、三二三年にキ教擁護の名の下に Dacia を破つたり帝に比しコ帝を見劣りさせないようにすることだつ

た。リ帝が對 *Data* 戦で兵士に祈らせた祈り (*de mort.* 5) は *Data* 軍内のキ教兵士の抵抗を弱めるためであったが、キ教徒はこの戦術を天使による教示に歸した。それ故コ帝に對してはリ帝の見たという奇蹟以上の奇蹟を歸する必要が生じ、夢とキ教的章徴の物語が作られたのである。Euseb. の場合は、かかる *Lact.* の課題とは異つた事情下にあつた。Euseb. 教會史初版のころ、コ帝は戦勝のキ教版の東方への普及を欲していたがリ帝は敵の人氣に有利なことを好まなかつたので、Euseb. は奇蹟を知らなかつたのは當然である。リ帝の死後はリ帝の過去の榮光に對してコ帝の榮光を競わせることは不用となり、教會の課題はコ帝の改宗を溯らせることであつた。然るに兩帝の決戦前たる *Lact.* 著作時には、キ教徒は兩帝に等しく結びつきコ帝はリ帝に凌駕されざらんことのみを求めた。三一〇年コ帝は *Sol-Apollo* を採用したが、この太陽宗教は異教とキ教との橋として好適であり、キ教徒の神は太陽と救世主との類比の故に「羲の太陽」であると異教徒に信じられていた。三一〇年いこのコ帝の太陽宗教では太陽は一種の創造主となり宇宙と被造物の仲介者、無名の神格の仲介者となつたのでキ教徒

はこれを不快と感じなくなつた。コ帝もキ教徒との友好を欲し、キ教徒異教徒雙方を満足させる曖昧語を用いた。かかるコ帝神學の曖昧を宮廷のキ教派(三二三年いらいのホシウス、三二七年いらいの *Lact.*)も異教派も自派に有利に解した。*Lact.* 奇蹟記事もこの線で解さるべきであり、リ帝の夢、三一〇年のガリアの幻 (*Parag. 7. 21. 1-3*) に對應して作り出されたキ教的幻であり、これには現實的事件を想定できない。米は三二七年いこの貨幣面に現れるものであり、コ帝が東方キ教徒を味方とするために作つたものを *Lact.* は過去に投影し、對リ帝戦の思想的準備を聖化したものである。

然らば *Lact.* 又はその史料の奇蹟記事は捏造か。これに關する *Gregoire* テーゼ V について、*Moreau* は *Lact.* 記事と第七頌詩(ガリアの事件)との關連を否定して言う。ガリアの幻は *Lact.* の夢の原型ではなく、後者はリ帝の夢の雛案でそれを忘れさせるために作られた。盾面に X があつた證據なく、星・太陽を付したものが多し。然らば盾面徽章が X でないとするれば、それはキ教的徽章か。コ帝は三二二年に改宗したのか。

著者はこれを肯定する *Groag, Alfoldi* を批判し、と

くに Alfolidi 説の根據たる Lact. の de mort. の三一三／五年成立説を否定して三一八／二〇年とする。そして元老院の建てた記念碑にも貨幣にも 313, 321 年の頌詩(第九、第十)にもキ教的章徴は現れないこと、頌詩が異教神名をあげないのはコ帝宗教政策の變化ではなく傳統的多神教と哲學的一神教との妥協の試みであり H. Orth, *Historia ecclesiastica*, コ帝のアヌリヌス宛書翰、凱旋門にも共通すること、對り帝決戦直前まで貨幣面には  $\Omega$  が支配すること、コ帝が三一三年にカピトル丘に登らなかつたのは内亂勝利者として凱旋の形式を遠慮したからであること、これらから著者はコ帝の三一二年改宗の決定的證據はなし、とする。

然らば三一七年いご現れた如き章徴は三一二年ごろには全く現われなかつたのか。著者はコ帝が Fausta との婚約に際して贈られた豪華な兜 (Pan. VI. 6. 2) に注目し、これが三一二年戦に使用された (Pan. X. 29. 5) とみ (Gregoire 説の繼承)、三一二／三年のトリエル貨幣にある  $\Omega$  を付した兜がそれであると推定する。そして  $\Omega$  は  $\Omega$  の退化したもの (Alfolidi 説) ではなく太陽神の章徴であるとする。このことの確認のためヘレニズム期い

らいの記念物に星型 ( $\Omega$  又は  $\Omega$ ) を求めそれらが支配者の神性の表示であり、帝政期貨幣では死後神化された故帝の表示であり、コ帝時代には帝家の家族にも用いられていることが示される。特にコ帝は星章の下に父帝のみならず  $\Omega$  を理解したとされ、コ帝が三一二年戦で父コンスタンティウスの指揮する天の軍勢 (輝く盾をもつ) の助力をうけたと語る三一二年の頌詩 (Pan. X. 14. 3) に注意をむけ、この天の軍勢の盾がコ帝兵士の三一二年戦時の盾の原型であろうとする Gage 説を重視する。そして、コ帝は兵士の盾に不死の章徴を付して父の天の軍勢になぞらえ、かつ自らを  $\Omega$  の保護をうけた父帝になぞらえ、自己を神格と同視した、と推論される。

この論證の補強のため三〇九年いごの  $\Omega$  をもつ貨幣をしらべ、星章はコ帝が普遍的支配の野望を強めた時と處に現れたと結論され、盾面の  $\Omega$  も最高神の章徴によって自己の優越性を示すものであったとされる。而も  $\Omega$  は異教的政治的傳統で古くより用いられたばかりか、キ教に於ても Jesus Christus の合成として用いられていた。Lact. は異教にもキ教にも通用する最高神章徴たる  $\Omega$  に環を付し ( $\Omega$  であり  $\Omega$  に非ず) 一層キ教的たらしめた。

彼は<sup>(46)</sup>米から、三二七年らしいの Siscia 貨幣で知られた米を作ったのである。三二二年には異教的にもキ教的にも解された米は三二七年以來キ教化されて米となった、と。

これに反して Vita 記事は、Lact. 頌詩、現實の Iarbarum、ロ帝像などの綜合であり、巷間のキ教的傳説とは考えられない。而もこの形の傳説は發表後數十年は知られていない、とするが、著者は Grégoire テーゼ VI に固執せず、上掲の Vogt の二論文<sup>(47)(48)</sup>、Piganiol、Skat などの成果を概ね認め、Grégoire とは別の解釋の可能性をみだしている。即ち Vita はコンスタンティウス二世の初めには存したが、この皇帝榮化のため Vita の普及は制限され、テオドシウス治下にコンスタンティウスへの遠慮がなくなった時初めて Vita は再び有名となった、という解釋 (Orgels 説) である。

以上の如き Moreau 論文は、Grégoire 學派として出發した<sup>(49)</sup>彼が Grégoire 説批判の諸成果をとりいれてこれを修正し、Lact. de mort. の奇蹟記事にかんする独自の卓見を展開している點高く評價せざるべきものである。勿論 Grégoire テーゼ V を否定しつつ彼が三二二年の頌詩

を三二二年の盾面の米原型としてもちだす點などは、私としては納得しがたいが、Moreau が以後の論争の第一線で重要な役割を演ずるのも當然であつた。(未完)<sup>(48)</sup>

(1) 拙稿、コンスタンティヌス大帝とキリスト教の問題。増田四郎編、現代歴史學の新動向 (一九五三年) 所載、五年執筆。

(2) André Piganiol, L'état actuel de la question constantiniennne 1939/49. Historia I. 1. (1950) p. 82 sq.

(3) Karl Friedrich Stroheker, Das konstantinische Jahrhundert im Lichte der Neuerscheinungen. Saeculum, III/4. (1952) S. 654 ff.

(4) Etienne DeLaruelle, La conversion de Constantin, État de la question. Bulletin de Littérature ecclésiastique, publié par l'Institut Catholique de Toulouse. 1953. pp. 37—54, 84—100.

(5) Joseph Vogt, Die konstantinische Frage. Die Bekehrung Konstantins. William Seston, Die konst. Frage. Faits politiques, armées, finances, in: Relazioni X. Congr. Intern. Scienze Storiche. 6. (1955). SS. 733—799.

(6) Stroheker, a. a. O., S. 680.

(7) Historia. Bd. IV (1955). Heft 2/3.

(8) Hermann Dörries, Das Selbstzeugnis Kaiser Konstantins. Göttingen. 1954. 431 S.



- Βίβλος παρῶστας. 1) 2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13) 14) 15) 16) 17) 18) 19) 20) 21) 22) 23) 24) 25) 26) 27) 28) 29) 30) 31) 32) 33) 34) 35) 36) 37) 38) 39) 40) 41) 42) 43) 44) 45) 46) 47) 48) 49) 50) 51) 52) 53) 54) 55) 56) 57) 58) 59) 60) 61) 62) 63) 64) 65) 66) 67) 68) 69) 70) 71) 72) 73) 74) 75) 76) 77) 78) 79) 80) 81) 82) 83) 84) 85) 86) 87) 88) 89) 90) 91) 92) 93) 94) 95) 96) 97) 98) 99) 100) 101) 102) 103) 104) 105) 106) 107) 108) 109) 110) 111) 112) 113) 114) 115) 116) 117) 118) 119) 120) 121) 122) 123) 124) 125) 126) 127) 128) 129) 130) 131) 132) 133) 134) 135) 136) 137) 138) 139) 140) 141) 142) 143) 144) 145) 146) 147) 148) 149) 150) 151) 152) 153) 154) 155) 156) 157) 158) 159) 160) 161) 162) 163) 164) 165) 166) 167) 168) 169) 170) 171) 172) 173) 174) 175) 176) 177) 178) 179) 180) 181) 182) 183) 184) 185) 186) 187) 188) 189) 190) 191) 192) 193) 194) 195) 196) 197) 198) 199) 200) 201) 202) 203) 204) 205) 206) 207) 208) 209) 210) 211) 212) 213) 214) 215) 216) 217) 218) 219) 220) 221) 222) 223) 224) 225) 226) 227) 228) 229) 230) 231) 232) 233) 234) 235) 236) 237) 238) 239) 240) 241) 242) 243) 244) 245) 246) 247) 248) 249) 250) 251) 252) 253) 254) 255) 256) 257) 258) 259) 260) 261) 262) 263) 264) 265) 266) 267) 268) 269) 270) 271) 272) 273) 274) 275) 276) 277) 278) 279) 280) 281) 282) 283) 284) 285) 286) 287) 288) 289) 290) 291) 292) 293) 294) 295) 296) 297) 298) 299) 300) 301) 302) 303) 304) 305) 306) 307) 308) 309) 310) 311) 312) 313) 314) 315) 316) 317) 318) 319) 320) 321) 322) 323) 324) 325) 326) 327) 328) 329) 330) 331) 332) 333) 334) 335) 336) 337) 338) 339) 340) 341) 342) 343) 344) 345) 346) 347) 348) 349) 350) 351) 352) 353) 354) 355) 356) 357) 358) 359) 360) 361) 362) 363) 364) 365) 366) 367) 368) 369) 370) 371) 372) 373) 374) 375) 376) 377) 378) 379) 380) 381) 382) 383) 384) 385) 386) 387) 388) 389) 390) 391) 392) 393) 394) 395) 396) 397) 398) 399) 400) 401) 402) 403) 404) 405) 406) 407) 408) 409) 410) 411) 412) 413) 414) 415) 416) 417) 418) 419) 420) 421) 422) 423) 424) 425) 426) 427) 428) 429) 430) 431) 432) 433) 434) 435) 436) 437) 438) 439) 440) 441) 442) 443) 444) 445) 446) 447) 448) 449) 450) 451) 452) 453) 454) 455) 456) 457) 458) 459) 460) 461) 462) 463) 464) 465) 466) 467) 468) 469) 470) 471) 472) 473) 474) 475) 476) 477) 478) 479) 480) 481) 482) 483) 484) 485) 486) 487) 488) 489) 490) 491) 492) 493) 494) 495) 496) 497) 498) 499) 500) 501) 502) 503) 504) 505) 506) 507) 508) 509) 510) 511) 512) 513) 514) 515) 516) 517) 518) 519) 520) 521) 522) 523) 524) 525) 526) 527) 528) 529) 530) 531) 532) 533) 534) 535) 536) 537) 538) 539) 540) 541) 542) 543) 544) 545) 546) 547) 548) 549) 550) 551) 552) 553) 554) 555) 556) 557) 558) 559) 560) 561) 562) 563) 564) 565) 566) 567) 568) 569) 570) 571) 572) 573) 574) 575) 576) 577) 578) 579) 580) 581) 582) 583) 584) 585) 586) 587) 588) 589) 590) 591) 592) 593) 594) 595) 596) 597) 598) 599) 600) 601) 602) 603) 604) 605) 606) 607) 608) 609) 610) 611) 612) 613) 614) 615) 616) 617) 618) 619) 620) 621) 622) 623) 624) 625) 626) 627) 628) 629) 630) 631) 632) 633) 634) 635) 636) 637) 638) 639) 640) 641) 642) 643) 644) 645) 646) 647) 648) 649) 650) 651) 652) 653) 654) 655) 656) 657) 658) 659) 660) 661) 662) 663) 664) 665) 666) 667) 668) 669) 670) 671) 672) 673) 674) 675) 676) 677) 678) 679) 680) 681) 682) 683) 684) 685) 686) 687) 688) 689) 690) 691) 692) 693) 694) 695) 696) 697) 698) 699) 700) 701) 702) 703) 704) 705) 706) 707) 708) 709) 710) 711) 712) 713) 714) 715) 716) 717) 718) 719) 720) 721) 722) 723) 724) 725) 726) 727) 728) 729) 730) 731) 732) 733) 734) 735) 736) 737) 738) 739) 740) 741) 742) 743) 744) 745) 746) 747) 748) 749) 750) 751) 752) 753) 754) 755) 756) 757) 758) 759) 760) 761) 762) 763) 764) 765) 766) 767) 768) 769) 770) 771) 772) 773) 774) 775) 776) 777) 778) 779) 780) 781) 782) 783) 784) 785) 786) 787) 788) 789) 790) 791) 792) 793) 794) 795) 796) 797) 798) 799) 800) 801) 802) 803) 804) 805) 806) 807) 808) 809) 810) 811) 812) 813) 814) 815) 816) 817) 818) 819) 820) 821) 822) 823) 824) 825) 826) 827) 828) 829) 830) 831) 832) 833) 834) 835) 836) 837) 838) 839) 840) 841) 842) 843) 844) 845) 846) 847) 848) 849) 850) 851) 852) 853) 854) 855) 856) 857) 858) 859) 860) 861) 862) 863) 864) 865) 866) 867) 868) 869) 870) 871) 872) 873) 874) 875) 876) 877) 878) 879) 880) 881) 882) 883) 884) 885) 886) 887) 888) 889) 890) 891) 892) 893) 894) 895) 896) 897) 898) 899) 900) 901) 902) 903) 904) 905) 906) 907) 908) 909) 910) 911) 912) 913) 914) 915) 916) 917) 918) 919) 920) 921) 922) 923) 924) 925) 926) 927) 928) 929) 930) 931) 932) 933) 934) 935) 936) 937) 938) 939) 940) 941) 942) 943) 944) 945) 946) 947) 948) 949) 950) 951) 952) 953) 954) 955) 956) 957) 958) 959) 960) 961) 962) 963) 964) 965) 966) 967) 968) 969) 970) 971) 972) 973) 974) 975) 976) 977) 978) 979) 980) 981) 982) 983) 984) 985) 986) 987) 988) 989) 990) 991) 992) 993) 994) 995) 996) 997) 998) 999) 1000)

(57) コンスタンティヌス論争の進展

- (45) J. Moreau, Sur la vision de Constantin (312).  
Revue des études anciennes, Tom. LV, n. 3—4, 1953.  
pp. 307—333.
- (46) Moreauが兵士盾面に付されたところのLact. 記事を\*  
と解することの後述。
- (47) J. Gagé, La «signum» astrologique de Constantin  
et le millénarisme de «Roma aeterna». Rev. Hist. et  
Philos. rel., XXXI, 1951, p. 186.
- (48) 本誌(34)所掲論文のほかに Pont Milivius ou Saxa  
Rubra ? La Nouvelle Clío, IV, 1952, pp. 369—373. \*  
と解す。五三年に於て Les „litterae Licinii.” Annales  
Universitatis Saraviensis. Philos.-Lett. 2 (1953), pp.  
100—105. \* 出た。後者は Lact. de mort. 48 の Euseb.  
hist. eccl. X 5, 1—14 とが傳へる。この勅令は、  
ガレリウス寛容勅令のみを用いてリ帝が作成した(リ帝は  
關與せず)勅令だと主張し、Gérogire テーゼ II を補強  
せんとするものだが、法文解釋に無理があると感ぜられ  
る。(一九五九・二・二八)
- (49) 紙數超過で切斷した後半は、本誌七または八月號に掲  
載の筈である。  
(神戸大學助教授)